

韓国の古代文化

—天文学を中心として—

坂上 務*

1985年7月に日韓文化交流協会招待の講演会が開かれた。また、1986年7月には韓国教授連合の招待で訪韓した。再度にわたる講演と見聞をもとに、韓国の古代文化、特に天文学に関わる文化をまとめてみた。

夜になると空に輝く無数の星々を見て、古代人はいろいろ欲しい願いと美しい夢の世界を想像したに違いない。高句麗人も同様で、天文現象に深い関心を寄せていた。このことは、古墳壁画に描かれた天空上に、生活、信仰と、希望をかいた絵が描かれているのを見てもわかることである。

今日知られている高句麗壁画古墳は75基あり、この中に星の絵が残っているものは21基である。高句麗の壁画古墳には、星の絵では星座(星宿)を描いたもの、星座と共に幾つかの星々を別に描いたものもあるが、大部分は星宿図である。星宿図を描くに当って、古墳の北の方にだけ描いたもの、北と南の二方、東西南北の四方、壁と天井、天井だけのものなどがある。それらは人間の目の高さより高いところに描いて、天空にあることを示そうとし、これによって被葬者の冥福を祈る意義を含めたい。壁画の星宿図は、多くは方位について一定であり、北には北斗七星、南には南斗六星があり、その他、その方向の主な星宿を1~2座描いている。

高句麗の古墳壁画で星宿を一方にだけ描いているものは、南浦市大安区域大井里にある5世紀頃のものといわれる大安里1号墳と、平安南道順川市北倉里にある5世紀中葉のものといわれる天主地神塚があり、ここではいづれも北斗七星だけが描かれている。北と南の双方に星宿図を描いているものは、徳花里1号墳(平安南道大徳郡徳花里、6世紀)と三宝塚などがある。ここには北斗七星と南斗六星が描かれている。それ以上の星宿を描いたものに、安岳1号墳(黄海南道安岳郡大楸里、4世紀末)と、舞踊塚(吉林省集安県、4世紀末)などがある。

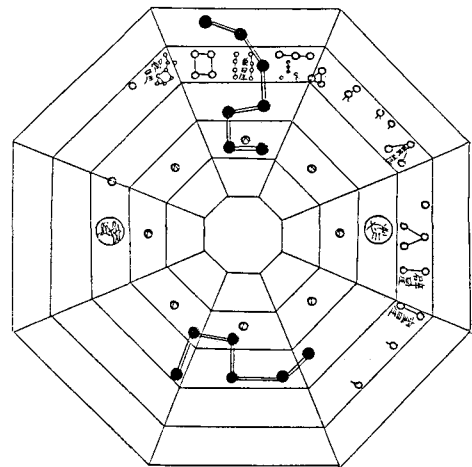
これらを通じて見ると、4世紀から5世紀初にかけて、方位毎に1~2の星宿を描いているのに、7世紀初吉林省集安県の集安4号墳、集安5号墳には北斗七星だけが描かれている。星宿の数の大小は、天文知識のすすみ、おくれを示すものではなく、1~2個の星宿でその方位を代表させるという習慣があったためであろう。そ

れは、6世紀末に既に壁画や天井に28宿をすべて描いたものもあることから理解できよう。

6世紀初古墳として知られる平安南道大同郡の徳花里2号墳と、真坡里4号墳(平壤市力浦区域戌辰里、6世紀初)には、28個のすべての星宿が描かれている。徳花里2号墳は1973年に発掘調査され、6世紀のものとして推定されているが、この中には太陽と月を意味する三足鳥と蛙の絵も描かれている。星宿は28宿の内の15宿が天井に一廻りに描いてあり、この中には「柳星」「天井星」「胃星」「壁星」「室星」などの星宿名までもはっきり記されている。星は金箔をうって表わし、6種の大きさに描いてある。高句麗の星宿図『天象列次分野之図』(後述)と対比して、その星群を互に線で結んだものは図のようになる。

次に真坡里4号墳の星辰図は、更に多くの星を知っていたことを示している。第2図は、真坡里4号墳の天井星宿図(復元図)である。これによって、当時は天の中心付近に多くの星宿を設定していたことがわかる。このような星宿は既に以前から占星術により定められたものであろうが、天上にも地上と同じような統治機構を考えたと見られる。

高句麗人は、日、月は勿論のこと、恒星と惑星などに対して、かなり具体的な知識を持っていた。火星、金星などに対し、その色合いの変化に注意した。そればかり



(徳花里2号墳の北斗七星・南斗六星)

図1 高句麗の壁画古墳の星辰図

* 九大農名譽教授 Tsutomu Sakanoue: Ancient Astrochronology in Korea

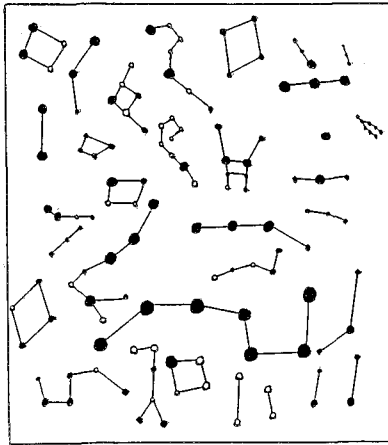


図2 眞坡里4号墳の天井星宿図

か、明かるい1等星，2等星などについても神話，伝説を結びつけて注目していた。銀河に対しては，その両側に見える牽牛星，織女星と共に注目していた。徳興星壁画古墳（南浦市江西区域徳興里，5世紀始め）の前室，南の天井には，東の方から西にかけて緑色の銀河を描き，その左右に牽牛と織女が別れを惜しむ場面を描いている。牽牛は玉皇上帝の命によって仕方なく織女と別れ，牛を引いて再び自分の仕事場にしおしおと歩みを進んでいる。織女は銀河のほとりに立って，涙をふくんで遠ざかってゆく牽牛を見送っている。この絵に登場する牽牛と織女は天空の天の川の岸辺に輝く牽牛星と織女星を観察した基礎の上に描かれたに違いない。牽牛，織女の伝説が，いつ頃から高句麗の人達にひろまったかはわからないが，5世紀初めの壁画に，このように現れた事実は，既に4世紀又はその以前に高句麗の人達に親しまれていたであろう。

これと似たもう一つの例は，中国吉林省集安県の集安の五塊墳の4号と5号（6世紀後半か7世紀の始め）である。これには華麗な壁画が描かれているが，この中に神仙が左手を胸の上にあげ，手にはコウリャンのような赤色の穀物の穂を握り，ひざまづいている絵がある。高句麗の人達は10月に天を祭ったというのが10月は収穫月で農業神の収穫と関連があるろう。「三国志」に高句麗人は「祠零星鬼神」と記述があるが，後漢書には「好祠鬼神社稷零星」と記されている。この記録によれば，高句麗人は好んで社稷に対する政事を行うと同時に零星についての祭りも好んで行ったというのである。この二つの書に記せられた零星とは何であろうか，ちなみに，後漢書には次のように記されている。「前書音義，龍角左角日天田，則農祥也。辰日記以午号日零星。」この記録によると零星は農事神であり，辰の日に牛をもって祭るといふ。それは龍の左の角を指し，天田という星であると

いう。青龍の左の角に位置し，東方七宿の角宿，即ち東南方の星宿である。角宿は，二つの星から成っていて，その内の一つは1等星のうちでも明かるいスピカとされている（天田ともいう）。牛頭神仙は，高句麗人が好んで祭った農業神である。この零星が，10月に祭天する伝統的な高句麗の行事と密接な関係があるためこの壁画の東南方にあらわれた。同時にそれは高句麗の天文と農業の緊密な関係で，星に対する宗教的信仰とも密接に関係があった理由があるろう。1986年現在も農業祭は残っているが零星は消えている。

壁画に見える7月7日（七夕）の牽牛織女の伝説も星に関する信仰の表現も，高句麗人の生活が天文知識と深い関係にあったことを物語る。このような天文の知識は，6世紀に至り高い水準に達したが，現在も『天象列次分野之図』の星図として存在している。この石刻天の図は，高句麗時代の末に一度失ったが，1395年に再発見されたものである。現存の『天象列次分野之図』は，このときのものに基いて作られたものである。そこには，天を365 $\frac{1}{4}$ に分ち，282個の星宿と，1467個の星が正しい位置関係で描かれている。この星図には，高句麗後期の人びとの天文知識が反映されているものとみてよいだろう。

以上の韓半島の古墳壁画から推定した天文学を中心とした韓国の古代文化の進展は，現在慶州に残されている1,300年前の瞻星台でも明らかであろう。これは花崗岩の石材で築かれたツボ型で，優雅な形の古い天文台といわれ，韓国の昔の文化を伝える同国の国宝で慶洲の東南2kmにあり，築造は新羅第27代王，善徳女王の世（647年）であると伝えられている。高さ9.46mで，基部は5.37mの直径，そして5.6mの正方形の二重の土台石の上に立っていて，南側の中央部にハシゴで登ると1mの正方形の四角の窓が見られ，下は土でうめられ上は空虚となっていて最上部は開いている。用いた花崗岩の石の数は365個で，太陽暦の一暦年の数と一致している。又12個の長方形の礎石が，4つの方向に3

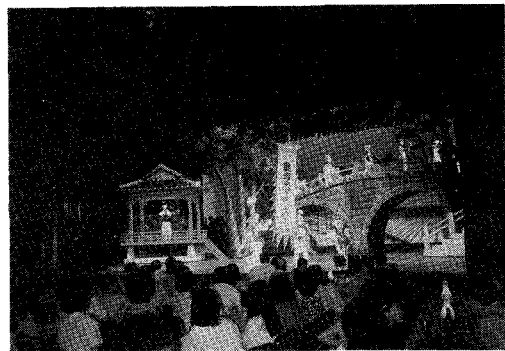


写真1 1986年農業祭（ソウル）

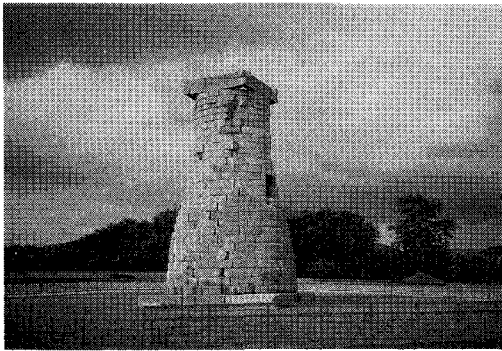


写真2 瞻星台(慶州)

つつつ置かれているが、1年を12ヶ月と4つの季節を現わしているとも考えられる。更に窓の敷居石までには、12層の石段が積み上げられ、窓の上部の縁から上が又12層の石積みとなっていて、これらは黄道帯のシンボル、又1年12ヶ月の月数を現わしているとも解釈

されている。建設当時の6,7世紀は世界的に寒冷な気候であり、又ようやく国家の体制が整いはじめたときで、冬の到来後、日の神が戻って来て太陽の加護で農作物が豊作になることを願った可能性が考えられる。さてここで、何を観測したかは明らかでないが、同種のものがあったといわれているソウルには、漏刻台があり、天文气象台として、使われたものともいわれている。

この頃の高句麗で発達した天文知識は、中国から伝わったかもしれないが、周囲の日本、その他に多くの影響を及ぼしていた。日本の高松塚の天井に見出された天文図は、そこに描かれた婦人たちの色模様の裳と共に、高句麗の壁画をみているようである。また、それと同時に、日韓両国間の文化的往来がどれほど頻繁であったかを見せつける。天文考古学の見地からも、又、農業との関わりからも朝鮮半島の古代天文学は見逃すことができない。尚、本稿の星宿図の同定については、石田五郎・元東京大学教授のお世話になった。

天体観測専門誌

天文ガイド

4月号 定価450円+税 3月5日発売!

ニューフェイス・テストレポート

最近話題の最新発売“双眼鏡”7機種

原哲也さんの解説

“宇宙のひも”とは何か?②

カスタムクラフト

マルチアストロカメラ②レンズ系

どこまで精巧に作れるか?どれだけ精密に測定できるか?

鏡面精度について

小糸んのルポ・三浦半島からのレポート

カノープスを見る

- 奇妙な星の話 ● コンピュータ・セミナー
- 4月のスターウォッチング...など情報満載!!

新刊案内

新透視版 星座アルバム

● 秋・冬編 星座写真と透明ビニールに描かれた星座絵を重ねた。春・夏編近刊。● 藤井旭著 定価2800円

天体観測野帖'87~'89

● 切りとる本 天体観測用データと各種観測記録用紙がワンセット。● 藤井旭/企画・構成 定価690円

星空ガイド1987

見開き2ページでひと月ごとの夜空を紹介するカレンダー。 ● 藤井旭/企画・構成 定価690円

万能星座早見 '87・'88

● 切りぬく本 外枠と組み合わせれば何通りにも使える便利な一冊。 藤井旭/企画・構成 定価690円

誠文堂新光社

東京都千代田区神田錦町1-5
電03(292)1221 振替東京7-128